

「モノ」づくりで元気を

常務取締役

小澤 和佳

Kazuyoshi Ozawa
Managing Director

維新の内乱で函館五稜郭に拠って官軍に抗したが、ついに敗軍の将になりし、かの有名な榎本武揚はその人物を見込まれ、後に明治政府に登用され諸外国の科学技術の実状を自ら見聞した。

今から約110年程前の第1回電気学会通常総会において、会長の榎本武揚氏ならびに幹事の志田林三郎氏が将来の電気学術工芸の進歩について予期すべきことを挙げている。

例えば

- 電線を用いず数理の河海を隔てて自在に通信又は通話し得る筋も来るべし。
- 電気空船の改良により航空の術高度に達し、空船に乗り空間に逍遙し或いは佳山勝水を賞観し或いは名所旧跡を搜索する時筋もあるべし。
- 光は電気磁気熱の如く勢力にして唯異なる所は、其の種類に在るは物理学家の深く信ずる所となるを以て、電気又は磁気的作用に依りて光を遠隔の地に輸送し、遠隔の地に在る人を自在に相見する事を得る方法の発見を望むも敢えて想像にあらざるべし。

など、人を幸せにすべき技術革新に夢と希望を託しており、聴衆をワクワクドキドキさせ会場はエキサイティングであったと言う。

2000年を迎えた現在、これらの夢は無線通信、飛行機およびテレビなどに具現化され、人々に感動を与えてきた。

未だに実現していないものは「動物と会話する」とことと「ゴビ砂漠を緑化する」の2つだけだそうです。

このうち「動物と会話する」夢は犬のロボットが大人気になっている上、猫のロボットも出現し実現に近づきつつあります。

我が国は敗戦の焦土の中で狭い国土に多くの人口をかかえ、食うや食わずの貧しい状態から脱却すべく欧米先進国に迫り着け追い越せを合い言葉に、農業から工業への民族の大移動を行い、国民が一丸になって「モノ」づくりに精を出し工業立国を目指し工業技術教育に力を注いだ。



その結果、職人が育成され職人の技(ワザ)と心意気を持って、日本人固有の器用さに加え頑固なまでのこだわりを拠り所に、高い品質を確保し世界から信頼を獲得してめざましい復興をとげてきた。

特に1960年代以降、我が国工業技術の進展はめざましく、白黒テレビ、電気冷蔵庫、電気洗濯機の3種の神器に始まり、カラーテレビ、クーラーなどの3Cを経てモーターゼーションの時代へと人々に感動を与える技術革新がはかられた。

そして人々の物質的欲望が満たされると共に工業製品の輸出立国の地位も勝ち取り、国民総生産(GDP)も2桁の高い伸びとなり大部分の人が中産階級を意識すると言う世界でも類のない公平な社会が実現された。

しかるに、1990年代に入ってからバブル崩壊といった「モノ」づくり経済とは全然異なる事態となり、国民総生産(GDP)も1997年マイナス0.1%、1998年マイナス1.9%と低迷が続き為替相場の円安進行と株価安と正に「日本売り」と言った三重苦に喘いでおり、アメリカのインターネットを中心とした好景気で活気のあることと比べると日本の製造業の競争力が低下し、技術に対する信頼度が失われつつあり「職人」ガタキの「モノ」づくりの気概がうすれて元気がなくなって来ていることが気掛りです。

ヨーロッパも1970年に、米国も1980年代に苦しい時代がありましたがEU統合とかインターネットや情報社会の構築など、血のにじむ努力で再生したではありませんか。

幸いなことに我が国には「モノ」づくりの技術が、特にこの地方には「からくり人形」に象徴される技術の蓄積があります。

21世紀に向かい夢をえがく「モノ」づくりの使命感とこだわりの精神の発揮こそが元気の出る源泉として大いに期待されます。